春は出産の季節

「ほっとやまはく」タイム㉟

野生動物にとって、出産・子育ては、個体の生涯の中で最も重要なイベントです。雄も雌も自分の遺伝子を残すため、子を産み育てます。子を産む時期は、動物種により違いますが、ツキノワグマ、ニホンジカ、ニホンザル、キツネ、タヌキ、アナグマなど1年に1回しか出産しない種は、春が出産の季節になります。

県内は平野部が少なく、近くに山があり、森があります。その里山に暮らす野生動物の中で、中型哺乳類として親しみのあるアナグマ、タヌキ、キツネの巣穴を拠点とする子育てについて紹介したいと思います。

アナグマの生後約２カ月たった子どもと親

母親を先頭に移動するアナグマの親子

山口県のアナグマの子育て

アナグマの名前の由来は、巣穴に暮らすクマのような動物ということから来ています。アナグマが生息している森に入ると、巣穴は確実に見つかります。直径が30㌢前後の巣穴があり、出入り口付近は、中からかき出された土でテラス状になっています。中には休むための広い部屋があり、各部屋はアナグマがやっと通れる程度のトンネルでつながっています。

1頭のアナグマの雌が生活するエリアには、20カ所以上の巣穴があります。出産・子育てはその中の一つを使い行います。出産は2月下旬から4月上旬、1～4頭の子を産み、巣穴の中で育てます。子育ては母アナグマのみで行います。子は小さく生まれ（推定100㌘程度）、巣外に出てくるのは約50日近くたってからです。子は、巣外に出てきた時の動きはたどたどしいですが、日に日に機敏になり、巣穴の周りで遊び回ります。お母さんはおっぱいをあげ、子どもの毛づくろいをし、よく面倒をみます。1年間、子どもたちは母親と共に過ごし、晩秋には母親と変わらない大きさに成長します。

両親に見守られる生後約３週間のタヌキの子ども

タヌキの出産・子育て

タヌキはアナグマと違い、夫婦で子育てをします。タヌキは自分では巣穴を掘ることがないため、アナグマの使っていない巣穴を利用します。出産は4～5月初旬、1～8頭の子を産みます。生まれた子の毛色は黒く、ツキノワグマの赤ちゃんと誤認されることがあります。タヌキの子は生後2～3週間すると、巣穴周辺で活発に動き回り、毛色もタヌキ本来の色に変化していきます。授乳は母親ですが、母親が採食に出掛けた時は、父親が子どもたちのそばについています。父親が採食に出掛けた時は、母親にカエルなどの食べ物を持って帰ることもあります。タヌキは、人間の環境にも順応し、普段水が流れない側溝の中や、空き家の床下、草むらなども利用し出産・子育てをします。子どもたちは秋まで親と一緒に過ごします。翌春には早い個体は、相手を見つけ、出産・子育てをします。

生後約２カ月のタヌキの子どもと親

キツネの出産・子育て

キツネは、アナグマやタヌキと比べると一回り大きな動物です。調査地内で毎年子育てをしますが、いつも決まって使う巣穴はありません。出産は3月中旬から4月中旬、1～5頭の子を産みます。キツネもアナグマ同様、雄は交尾のみで子育てには参加しませんが、雌の子が母のもとに残り、弟妹の面倒をみるヘルパーになります。ヘルパーとは自分は出産しないが、子育てを手伝う個体の総称です。お母さんが採食に出掛けた時は、娘であるヘルパーが子どもたちの面倒をみます。キツネの子は、アナグマやタヌキの子たちと比べると親に連れられるより、子同士で一緒に行動していることが多く、子どもだけの行動が自動カメラではよく撮影されます。雄の子は秋には母親のもとを去り、新たな場所に移ります。

子どもたちに授乳するキツネの母親

きょうだいで遊び回るキツネの子ども

里山の動物たちのにぎわい

アナグマが出産・子育てに使う巣穴も、20～30年の長い周期で見ると、キツネやタヌキが出産・子育てに利用しています。アナグマはたくさんの巣穴を持っているため、他の動物も利用することができるのです。

アナグマ、キツネ、タヌキが子育てに使った巣穴

住宅地の裏山である里山に一歩踏み入れてみると、野生動物たちのにぎわいを感じることができると思います。

田中浩（動物担当学芸員）

▽次回は4月5日です。

※写真はいずれも山口市内

山口県立山口博物館
ＴＥＬ083－922－0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。
最新情報はホームページで